



支援の継続を訴えました。先月25日のネパール大地震の被災地に派遣されていた長崎大学の教授が帰国し、現地での活動について報告しました。ネパールに派遣されたのは、長崎大学熱帯医学研究所の山本太郎教授です。ネパールで先月25日に発生したマグニチュード7.9の地震では、およそ8000人の犠牲者が出ています。山本教授は、長崎大学と医療関係者の国際NGO・AMD Aから派遣され、先月30日から6日間、首都・カトマンズからおよそ100km離れた「カリチョウ地区」などで医療支援を行いました。現地では、骨折や打撲などのケガ人が多かったということです。山本太郎教授は「できていた家が土なので、土の倒壊による被害が多く、おそらく土砂災害と一緒に生き埋めのようにになっている」と話しました。山本教授は、1日およそ70人の被災者が訪れる病院で、医療支援のほか安全な水の確保や食料支援なども行いました。しかし、医師不足でまだ治療を受けられない人がいるなど課題は多く、山本教授は「継ぎ目のない支援が必要」と話しています。山本教授は「震災の急性期にやるべきことが終わったのでそれで終わり、ではない。今度は復興支援が始まるわけですからそれにつなげていくのが大事」と語りました。山本教授は多くの人に現状を知ってほしいと訴えていて、今後もネパールに対して、支援を続けていきたいとしています。